

戦前地方博覧会における地域イメージの構築

— 祖国日向産業博覧会 (1933) のケーススタディー

The Construction of Regional Images in Prewar Japan

— A Case Study on The Sokoku -Hyuga Sangyo Exposition, 1933 —

長谷川 司*

Tsukasa Hasegawa

From the nineteenth to the mid-twentieth centuries, expositions were important events for nations and regions. Municipalities demonstrated their regional identity in local expositions. This paper examines one of such exhibitions, called Sokoku-Hyuga Sangyo Exposition held in Miyazaki City in 1933, and analyses how it contributed to the construction of its regional images.

Sokoku-Hyuga Sangyo exposition, the first exposition ever held in Miyazaki, presented three images to define the nature of the city: “Boom town”, “Sokoku-Hyuga” and “Tropical paradise”. By investigating each image in details, I conclude that each of them, distinguished from each other, was elaborately proposed in proper ways.

キーワード：地域イメージ、地方博覧会、祖国日向産業博覧会

Key Words : Regional Images, Local Exposition, Sokoku-Hyuga Sangyo Expositon

序

ある地域が広く社会の中で特定のイメージを獲得していく過程には、二つのまなざしが関わっている。一つは、当該の地域の外部からそれを見つめる他者からのまなざしであり、もうひとつは、その内部の人々が自らが生存する地域に対して投げるまなざしである。近代の社会にあっては、前者は、国民国家における権力関係を反映して、首都の中央政府やマスメディアなどが、国家を構成する下位の地方圏に対して特定のイメージを配分する過程と深くかかわりを持ち、また、後者は、中央政府や首都に対して、自らの地域を印象づけ、より多くの国家資源の配分を期待する一方、それに対する反発や自己顕示としての地方ナシヨ

ナリズムや地方人のアイデンティティ表現と密接な関係をもっている。しかし、いずれにせよ、地域のイメージは、外部のものであれ、内部のものであれ、それにかかわる人々の絶えざる構築-再構築によって、つねに生成と変化を繰り返している。そして、その地域イメージに具体的な表象を与える契機として、近代の国民国家において重要な役割を担ったのは、国民にひろく情報を普及させる手段としてのマスコミュニケーション装置であり、また、中央政府や地方政府が開催する博覧会などのイベントであった。

本論文が着目するのは、この後者としての地方博覧会である。そして、分析の対象として、とりわけ深く関心を寄せるのは、博覧会の空間構成、パビリオンの意匠、展示デザインなどにおいて現

れる視覚イメージである。そもそも視知覚が人間のイメージ形成にとってきわめて重要な位置を占めることはいうまでもないことであるが、近代社会においては、19世紀後半以降の日本も同様に、すでに写真や映画、グラフィックデザインなど視覚的イメージを大量に複製し利用するシステムはこれらイベントの開催において、きわめて重要な位置づけを与えられていた。そして、地方博覧会の開催者たちも、地域を視覚的に表現することに多大な関心をもっていたのである。

ここで、すこし博覧会が近代社会において果たした役割について触れておく。博覧会は、19世紀、自然の事物を視覚的な特徴から選別し分類していく博物学的なまなごしを利用した新たな視覚装置として登場した。19世紀から20世紀を通して、帝国主義国家は、新たな視覚経験の場であった博覧会をアイデンティティ表現の場として積極的に利用するのである¹。万国博覧会(以下、万国博と記す)を開催する植民地帝国は、パビリオンの配置構成、展示内容や陳列方法を通じて自国の世界観を視覚化し、国家のアイデンティティを表現した²。

後発の帝国主義国家として、19世紀後半の極東に登場した日本もその例外ではなかった。日本政府も、外国政府主催の万国博へ積極的に出展していった。それと並行して、日本政府は、自国内においても万国博の開催を、海外、とりわけ欧米列強に対して、日本の新興帝国主義国家のプレゼンスを顕示することを目的に巨大な国家的イベントとして計画した。こうした万国博への執着は、戦後にあっても持続し、1970(昭和45)年の大阪万国博の開催へと引き継がれたことはあらためて論じる必要もないだろう。

一方、そのような海外に向けられた自己表現と

しての博覧会とは別に、国内において、1877(明治10)年から1922年まで5回に渡っての日本政府主催の内国勸業博覧会が開催されている。このような国内博覧会は、帝国主義国家のアイデンティティを内側に向かって、つまり、帝国国民としての一般民衆に認知させ浸透させる意味を持っていたといえよう。会場には、日本各地、そして植民地から数多くの名産品が収集展示され、また、パノラマや写真など視覚装置を使った景勝地の再現などが行われた。これら地域の特産品や景勝地は、近世においても、ひろく日本全体にそのイメージが流布され、藩域をこえて流通していたものである。しかし、それらのイメージの生成と配分のヘゲモニーは、封建権力の主体である将軍や藩主、あるいは、上方や京の豪商たちによって占有されていたものであった。そのようないわば近世的な地域イメージを、再構築あるいは再編成していくことが国内博覧会の担った役割であったと言い換えてもよい。

日本政府主催の国家イベントとして大規模な国内博覧会が開催される中で、日本国内各地では、大小の地方博覧会が開催された³。国家イベントとしての政府主催の国内博覧会に出品した国内地方が、地方のアイデンティティを確立するために地方博覧会を開催していく。

こうした地方博覧会において、開催者たちは、どのようにして地域を視覚的に表現していったのだろうか。それが本論文の問いである。本論文では、宮崎県で開催された祖国日向産業博覧会(以下、祖国日向博と記す)における地域イメージ表現を事例に考察することで、この問いに答えたい。この博覧会の主催者は、宮崎市と宮崎商工会議所だったが、この博覧会の開催は宮崎県の協賛事業でもあった。宮崎県で初めての地方博覧会の

1 Morton(2000=2002)を参照。

2 吉見(1992)を参照。

3 日本の各地で開催された地方博覧会については、湯原公浩編(2005)に詳しい。

開催は、それまでは視覚化する経験を持たなかった宮崎という地域社会にとって、自らの地域を視覚的に表現する契機になった。では、祖国日向博の開催者たちは、どのようにして宮崎の地域イメージを表現していったのだろうか。

1. 祖国日向博の開催

本館—特産品／国産品の展示

昭和のはじめから10年代に開催された地方博覧会の多くは、国防や産業振興をそれらのテーマにしていた⁴。こうした全国的な傾向の中で、祖国日向博は、産業振興を目的にして開催された産業博覧会だった⁵。1933(昭和8)年の3月17日から4月30日までの45日間、会場には、21の博覧会施設が建てられた。

産業博覧会の開催において何よりも重要視されるのが、生産物の列品展示である。こうした生産物の列品展示は、可能な限り多くの生産物を並べることで生産力を示し、さらには生産物の品質の優劣を精査させるために行われた。

祖国日向博の開催者たちが全国から収集した生産物を展示したのが、会場内で最大のパビリオン“本館”である。本館には、大日本帝国内の一道三府三十三県さらには植民地から収集された生産物が一堂に展示されていた。凹字型の本館には3本の歩道が通っており、歩道の両側が出品地域ごとの展示小間になっていた。

こうした本館の展示は、地域ごとの生産物の品質、産業技術の優劣を比較させる効果を持っていた。しかし、生産物の地域ごとの列品展示は、もう一つの効果も持ちあわせていた。各小間に展示されたのは、博覧会出品のために、それぞれの地

域が選りすぐった生産物すなわち地域を代表する“特産物”であった。国内各地の生産物を一堂に展示していた本館において、地域は特産物を展示することで自地域を表現していく。この際、展示小間に並べられた特産物は、地域を代表すると同時に地域を表現するのである。

観客たちは特産物を鑑賞することで、生産物の品質を比較するだけではなく、出品地域をイメージしていく。特産物は、観客たちに地域をイメージさせるのである。

さらに、本館を一巡すれば、観客たちは、大日本帝国内の各地が出品した特産物を見て回ることができた。つまり、本館は館全体において、各地域の特産物を包含するより大きなカテゴリーである“国産品”を展示していたのである。本館は、日本各地の生産物を地域別に列品展示することで、国内各地域ひいてはそうした各地域を包含する日本という国家をイメージさせるパビリオンだったのである。

会場配置の特徴—本館裏に広がる興行地帯

祖国日向博で最大のパビリオンが本館であった。本館以外のパビリオンは、展示テーマごとに設営された“特設館”とされ、本館を囲むように配置された(図2)。

入場門から本館へと向かって、右手には林産館、恩賜館、朝鮮館、教育館、国防館。左手には祖国館、鹿児島館、宮崎館、電気館、機械館。そして、本館の裏側には、子供の国、日光館、海女館、演芸館、野外演芸場があった。

これらパビリオンが建ち並んだ会場配置の特徴を、皇族観覧時に見ることができる。会期中の4月9日、宮崎市市内では、宮崎県から軍への水上機

4 吉見(1990)を参照。

5 また、会場には国防館が特設されていた。祖国日向博が産業博覧会として開催されたことおよび会場には国防館が設営されたことから、祖国日向博は、地方博覧会の全国的な開催傾向を反映した博覧会だったと言える。



図1 本館

出所：宮崎市役所 1934

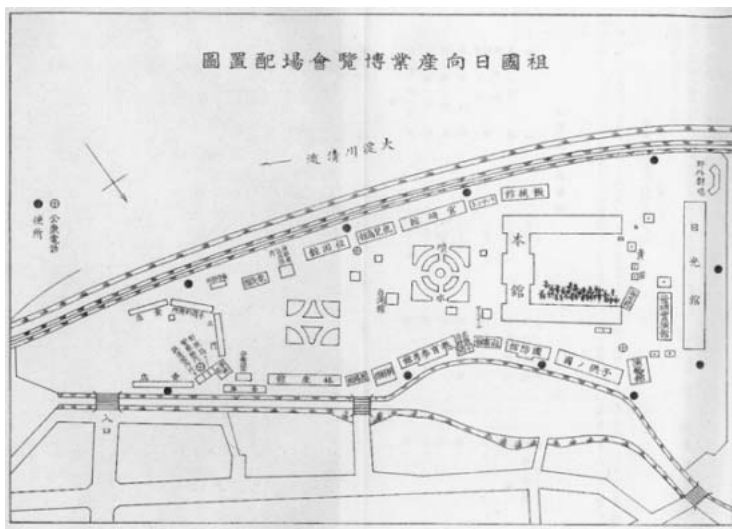


図2 祖国日向博の会場配置図

出所：宮崎市役所 1934

の献納命名式が行われ、この式典には、梨本宮守正が出席していた。式典終了後、梨本宮は博覧会長川越壮介の案内で、祖国館、鹿児島館、宮崎館、国防館、本館、迎賓館、林産館を観覧している⁶。これらは、産業、工業、国防、教育といった国家目標と博覧会の開催目的に沿った展示内容

を持つパビリオンであったと言ってよい。これらのパビリオンは、すべて本館の表側に配置されていた。つまり、開催者たちが、梨本宮を、祖国日向博開催の大義名分を反映したパビリオンに案内し、本館裏から周到に避けていたことがわかる。

梨本宮の台覧に際して、開催者たちは、博覧会

6 『宮崎新聞』(1933年4月9日、第2面)を参照。

場への入場を15時半までで打ち切り、観客たちを本館の裏手へと誘導している⁷。本館裏には、子供の国、日光館、海女館、演芸館といったパビリオンがあり、さらには有田洋行曲馬団⁸のサーカスがあった⁹。本館裏に配置されていたパビリオン、興行物は、娯楽目的の観客たちを当て込んだ見世物的な内容を持っていた。

飛行塔など子供向けの遊具が並ぶ子供の国、日光東照宮の縮小模型や徳川家宝物などが観客たちの日光への旅情を誘う日光館。演芸館では宮崎市内の芸妓たちを取りまとめた松山検番、橋検番が小唄や舞踊を披露した。そして、本館裏でもとりわけ人気を呼んでいたのは海女館である。ガラス張りの巨大水槽が置かれた海女館では、赤い腰巻きに肉シヤツ姿の美人海女たちによって伊勢志摩の真珠採りが再現されていた。会期中の『宮崎新聞』は、さかんにこの海女館を「エロの殿堂」、「エロ百パーセント」と書き立てている¹⁰。こうした海女館の観客たちの興味は、真珠取りの再現ではなく、濡れて透ける美人海女たちの裸体にあった。海女館は、エロティックな展示で人気のパビリオンだったのである¹¹。

産業、工業、国防や教育といった国家目標や産業博覧会の開催目的に沿ったパビリオンが並ぶ本館の表側とは対照的に、本館の裏手に広がっていたのは娯楽目的の観客たちで賑わう興行地帯だった。このことから、祖国日向博のパビリオンは、本館の表／裏で違った展示内容をもっていたことがわかる。中心に本館が配置された祖国日向博の会場を特徴づけたのは、“産業博覧会”という開催

形式であり、本館表側のパビリオンも、そうした開催テーマに沿った展示内容をもっていた。しかしその一方で、本館裏には、興行地帯が設けられ、祖国日向博は娯楽を求める観客たちの関心をも集めたのである。

2. “新興都市”

“辺境”から“新興都市”へ

次の一文は、祖国日向博の開催趣旨において述べられたものである。

仰々本市は皇祖発祥の聖地祖国日向の中枢にあり、畏くも往古神武大帝の都し給ひし土地柄であるにも拘らず、西陲の一郭に僻在して久しく交通不便の間に推移し来った為め却って天下の顧みるところとならなかつたのであるが、去る大正十二年縣民多年の翹望たりし日豊線の全通成るや、祖国日向は豊富なる物産を擁して果然全面的開拓を見るに至り、此処に新しい運命を迎へて挙県躍進の日を続け来ったのである¹²。

「日向」は廃藩置県以前の宮崎県域の呼称である。「皇祖発祥の聖地日向の中枢」とは、日向つまりは宮崎県の中心、県庁所在地である宮崎市を指す。さらに「往古神武大帝の都し給ひし土地柄」は、宮崎市が、かつては神武天皇が都をおいた“旧都”であることを表現している。“旧都”は、過去においては都だったことを強調する。しかし、

7 同上を参照。

8 調教した猛獣を使った曲芸を披露した有田洋行曲馬団は、日本におけるサーカス団の先駆けとして知られている。

9 本館以外のパビリオンは特設館とされていたが、さらに特設館にも2つの区分があった。博覧会場への入場料30銭だけで入館出来る一般館と入場料とは別に入館料をとった特殊館である。特殊館だったのは恩賜館、日光館、海女館、演芸館の4館である。特殊館のうち、明治天皇や大正天皇の遺品、皇族の日用品を展示した恩賜館だけが本館の表側に配置された。

10 さらに、海女館は、宮崎新聞社の後援を受けていた。すなわち、先の新聞記事は、海女館の宣伝でもあった。昭和初期の博覧会においては、新聞社からの後援を受けて、全国からやってきた興行師たちが見世物的なパビリオンを出展していった。祖国日向博の本館裏で見世物的な興業物を披露していたのも、その多くが新聞社からの後援を受けてやってきた興行師たちだった。

11 湯原(2005)を参照：日本国内で開催された他の地方博覧会においてもこの海女館が出展されていた。

12 宮崎市役所編(1934)、1頁より引用。

その一方で、“旧都”を強調すればするほど、現在は都ではないということつまりは辺境であることの強調になる。

日本神話において、初代天皇である神武は、日向から東にある大和へと東征する(「神武東征」)。神武の東への移動によって、日向は都ではなくなり、「西陲の一郭に僻在」つまり西の隅の僻地になった。僻地となった日向すなわち宮崎は、交通が不便だったことから長らく、「天下の顧みるところとならなかった」のだという。

ながらく僻地だった宮崎にも「大正十二年」(1923年)に転機が訪れる。交通の不便を改善する大分と宮崎を結ぶ日豊線の全通である。交通が改善されることで、「豊富な物産」を擁する宮崎が、「新しい運命」を迎えたというのである。

日豊線の全通から10年を経た1933(昭和8)年に祖国日向博が開催された。開催趣旨において述べられているのは、辺境であった宮崎が、鉄道路線開通に代表される近代化によって生まれ変わり、新たに勃興していくという未来への展望である。ここでは、開催趣旨の一文に見られたような、宮

崎が新しく勃興していくというイメージを“新興都市”と呼びたい。

橋橋—“新興都市”の象徴

まず、“新興都市”は、パビリオンの近代的な建築意匠産業パビリオンでの最新の産業製品の展示、工業パビリオン¹³での最先端の工業技術の紹介といった祖国日向博の開催自体が表現していた。さらに、“新興都市”は、昭和初期の宮崎市近代化を象徴的に体現した橋橋の視覚イメージをモチーフに表現された。博覧会を記念して発行された記念誌、会場案内に見られるのは、橋橋をその中央に配置した宮崎市街の航空写真である(図3)。

博覧会の開催当時、九州一の長さを誇った橋橋は、新興都市宮崎の象徴であった。さらに、橋橋付近は宮崎市の交通の要所になり、橋につながる宮崎市のメインストリート橋通には次々と新店舗が建ち商店街が形成されていった¹⁴。

祖国日向博の会場地に宮崎市内の大淀川畔の鶴之島町が選ばれた理由は、橋橋を間近に見ること



図3 記念誌に見られる新興都市の象徴橋橋
写真タイトル「伸びゆく宮崎市」

出所：宮崎市役所 1934

13 工業技術部門別に特設された工業パビリオンは、林産館、機械館、電気館の3館である。林産館の館内では、宮崎県内で生産する木材(欽肥杉など)の紹介と熊本営林局による官有造林の模型が展示され、機械館では、三井、三菱の製品展示と鹿児島地方専売局による煙草の製造実演とその即売が行われた。神都電気株式会社が運営した電気館では電気機器展示と電気設備相談所を行っていた。こうした工業パビリオンでは、当時の日本における高度な工業技術を紹介すると同時に、宮崎県内での各工業の発達状況を表す展示が行われていた。

14 小野(1986)を参照。

ができるというその眺望条件にあったのかもしれない。大淀川に、鉄筋コンクリート製の橋橋が架橋されたのは、博覧会開催の前年1932(昭和7)年のことである。「台風銀座」と呼ばれる宮崎において、木製だった橋橋は、激しい流水のたびに流失を繰り返していた。橋橋が永久橋(流水に強いコンクリート製の橋)として架け替えられる。このことは、宮崎市民の悲願であった。そしてさらには、橋橋の永久橋化は、“新興都市宮崎”を象徴する出来事でもあった。

橋橋の永久橋化は、宮崎県の再置50年を記念した協賛事業の一つとして行われた。さらに、特記されるべきは、祖国日向博が橋橋の永久橋化と同じく、県の協賛事業であったことである。祖国日向博を主催したのは、宮崎市と宮崎商工会議所である。しかし、祖国日向博の開催は、県の協賛事業でもあった。

祖国日向博が開催された1933(昭和8)年は、宮崎県が再置されてからちょうど50年を迎える記念の年であった¹⁵。1933(昭和8)年までに、宮崎県は数々の協賛事業を行っている。県経済においては日向興業銀行(1932)を新設し、宮崎市内では近代的な生活基盤である上下水道、電気、ガスを整備した。こうした宮崎県による再置50年を記念した協賛事業は、宮崎を急速に近代化していった。そして何よりも、県の協賛事業を象徴したのは、1932(昭和7)年の宮崎県庁舎¹⁶と橋橋という宮崎県を代表する2つの木造建築の建て替えである¹⁷。コンクリート造りのゴシック風様式で建て替えられた宮崎県庁舎と橋橋は、宮崎市の中心部の景観を一変させた。しかし、これら2つの建築物が新興都市の象徴になったのは、建築の新しさのゆえではないだろう。木造建築が新しくコンクリート製

で造り替えられるという出来事こそが、古い町が新しい町へと生まれ変わっていくという都市変容を象徴したのである。祖国日向博の開催において、橋橋をモチーフに表現された“新興都市”は、宮崎市が近代化によって古い町から新しい町へと生まれ変わっていくというイメージであった。

3. “祖国日向”

戦前戦中期の日本において、『古事記』、『日本書紀』に記される日本神話は、天皇制国家であった日本の歴史として扱われていた。日本神話の「筑紫の国日向」を舞台に展開する、イザナギ、イザナミの国生みから、アマテラス、スサノオ、ツクヨミの誕生、ニニギノミコトの天孫降臨、初代天皇とされる神武の東征までの神話を「日向神話」と呼ぶ。皇祖について語る日向神話は、日本神話の中でもとりわけ重要視されていた。そして、日向神話の舞台である神話上の「筑紫の国日向」は、皇国日本にとって特別で神聖な“皇国の起源地”であった。

祖国日向博の名称にも見られる「祖国日向」は、天皇の祖先の国である日向を意味する言葉である。「祖国」とは天皇の祖先の国を意味し、「日向」は廃藩置県前の宮崎県域を指す。「祖国日向」は、祖国日向博(1933)をはじめ、祖国振興隊(1940)、祖国日向建国博覧会(1940)、県政要覧『祖国日向の展望』(1941)など、1940(昭和15)年をその頂点にして、敗戦(1945)までの宮崎県内の事業や運動において用いられた¹⁸。「祖国日向」と呼び、宮崎が“皇国の起源地”であることを県外にアピールしつつ県民の一体性を鼓舞していた¹⁹。

15 1871(明治4)年の廃藩置県によって、日向と呼ばれた現在の宮崎県域には美々津県と都城県の2県が置かれた。1873(明治6)年には2県が統合され宮崎県が置かれたが、1876(明治9)年には宮崎県は鹿児島県へと合併された。分県運動を経て宮崎県が再置されたのは、1883(明治16)年のことである。

16 現在の宮崎県庁本館。宮崎県庁本館は、建築家置塩章によって設計された建築物である。宮崎県庁については、永井(2008)を参照。

17 宮崎県庁舎(10月)と橋橋(4月)。

18 坂上他(1999)、312頁を参照。

19 戦後の歴史家たちは、皇国史観にもとづいて醸成されていった戦前戦中の宮崎県における地域主義を「祖国日向主義」と呼んでいる。千田(1999)は、こうした祖国日向主義が、あくまでも皇国主義の中の地域主義であったことを指摘している。

「最も古く、最も新しい町」—“新興都市”にして
“祖国日向”

博覧会が開催される2年前の1931(昭和6)年、全国でもまだ珍しかった定期遊覧バスが宮崎市内を走り始めた。宮崎バス会社の定期遊覧バスである。この遊覧バスの車内案内は、名所名勝の案内にとどまらず、広く宮崎地域の経済、文化を紹介することにその特徴があった。この車内案内において、女性バスガイドたちは、宮崎の町を「最も古く、最も新しい町」と紹介していた。「最も古く、最も新しい町」は、祖国日向博開催当時の宮崎を的確に言い表している。当時の宮崎市は、急速な近代化を遂げていく“新興都市”であった。つまりは「最も新しい町」であった。さらにその一方で、宮崎は、天皇制国家であった日本において「最も古い」、「皇祖発祥の聖地」というイメージも合わせ持っていた。そして、祖国日向博の開催においても、「新しい町」のイメージである“新興都市”は、“皇祖発祥の聖地”というイメージと合わせて表現された。ここでは、こうした宮崎が持つ“皇祖発祥の地”というイメージを“祖国日向”と呼びたい。“祖国日向”は、主催者であった宮崎市、宮崎商工会議所が、出展した祖国館で表現されている。しかし、“祖国日向”は、他のパビリオンが表現するイメージとの対比の中で演出されていた。

対比される“祖国日向”

白基調の近代的な建築意匠を持つパビリオンが並ぶ祖国日向博の会場は、「白亜の殿堂群」と呼ばれた。こうした会場にあって、朝鮮館と祖国館は、それらの外観からひととき異彩を放っていた(図4)。まず、朝鮮館である。大日本帝国の外地と呼ばれた植民地のうち、満州、台湾、南洋からの出品物は内地の道府県と同じく、本館に展示された。その一方で、朝鮮からの出品物だけは、朝鮮総督府が特設した朝鮮館に展示された。朝鮮館には、皮革製品や紙、漆器、陶器、乾物といった特産物と朝鮮の風俗や旧蹟を描いたパノラマなどが展示され、朝鮮を視覚化していた。しかし、なによりも、朝鮮を視覚的に表現していたのは、朝鮮館の建築意匠である。朱と青で塗られた朝鮮館の建築には、李王朝の宮殿様式が用いられた。こうした朝鮮館の建築意匠が演出していたのはエキゾチズムである。朝鮮館パビリオンが持つ建築意匠が、植民地朝鮮をエキゾチックに視覚演出したのである。

同じ大日本帝国内の地域と言っても、宮崎と植民地朝鮮には、内地と外地という違いがあった。大日本帝国が領土を拡大させる中で開催された地方博覧会においては、植民地パビリオンが特設されている。こうした植民地パビリオンは、外地を内地の人



図4 朝鮮館(左)と祖国館(右)の外観

びとのエキゾチシズムを満足させる対象に仕立て上げていった。こうすることで内地の地方は、大日本帝国の国家アイデンティティを分有し、内地としてのアイデンティティを確立していったのである。祖国日向博の朝鮮館も、その例外ではなかった。さらに祖国日向博において特徴的なのは、エキゾチシズムを演出していた朝鮮館の正面に、ナショナリスティックな外観を持つ祖国館が配置されていたことである。祖国館の建築意匠は、朝鮮館が演出するエキゾチシズムをより際立たせた。神道が国家宗教であった昭和初期の日本において、祖国館は、神社神殿の様式である神明造りで建てられていた。祖国館は、ナショナリスティックな外観を持っていたと言える。向かい合う朝鮮館と祖国館は、それらが持つ対称的な外観からエキゾチシズムとナショナリズムを演出していたのである。

展示内容からすれば、祖国館は、宮崎館(図5)と対比されるものであった。宮崎館に展示されたのは、米や日向夏、ネーブル、蜜柑などの柑橘類や野菜類、ハムなどの加工食品、水産物、家具、刃物などの宮崎県内の市町村から出品された生産物である。こうした出品物は、県内各市町村が博覧会への出品のために、選りすぐった特産物であった。いわば宮崎館には、県内市町村で最新の生産技術でつくられた特産物が列品されていたのである。こうした特産物の展示を通して、宮崎館

が表現していたのは、“宮崎の現在”だった。宮崎館が県内特産物を展示して“宮崎の現在”を表現した一方で、祖国館は日本神話で語られる神代にさかのぼる“宮崎の過去”を表現していた。

“祖国日向”は、朝鮮館が表現するイメージとは対比的なナショナリスティックなイメージであり、宮崎館が表現する“宮崎の現在”とは対比的な“宮崎の過去”を表現するイメージであった。次に、こうした“祖国日向”を表現した祖国館の展示について見ていきたい。

日向神話パノラマ―日向神話の視覚化

祖国館に展示されたのは、人形と背景画で制作された9景のパノラマである(図6)。このパノラマは、声と文字で伝えられてきた日本神話の世界を視覚化していた。パノラマが視覚化したのは、日本神話における「筑紫の国日向」を舞台にした日向神話である。

このパノラマを制作したのは、博多人形作りの名人と呼ばれた小島与一であった。しかし、パノラマの作成は、小島による独創的なものではなかった。祖国館のパノラマを制作するためには、神話を忠実に再現するための日本神話の知識、さらには日本史と宮崎県の郷土史についての知識を必要とした。これらの知識は、神話上



図5 宮崎館



図6 日向神話パノラマ

- | | | |
|-------------|----------|------------|
| 1. 橋の小戸の櫂々原 | 2. 天ノ岩屋戸 | 3. 天孫降臨 |
| 4. 木花開耶姫 | 5. 海幸山幸 | 6. 鵜戸の窟 |
| 7. 皇子原 | 8. 宮崎の宮 | 9. 美々津の御船出 |

出所：宮崎市役所 1934

の「日向」を“宮崎県の過去”として位置づけ、皇国日本の歴史と宮崎県地域の歴史とを結びつけるために必要であった。そこで、パノラマ制作のために、小島は、祖国館の展示委員と綿密な打ち合わせを行っている。祖国館の展示委員10名は、神宮宮司、学校長、図書館長、史蹟調査員、高等農林学校の教授、博物館主事といった肩書きを持つ、宮崎県を代表する文化知識人たちであった²⁰。なかでもパノラマの制作過程において、中心的な役割を果たしたのが、当時宮崎中学校校長だった郷土史家、日高重孝である。日高は、祖国館でのパノラマ展示が決定すると、日向神話を再現するパノラマの人形の形態から舞台風俗について、小島人

形師と綿密な打ち合わせを行っている²¹。

日高重孝『伝説の日向』(祖国館観覧の手引き)

日高重孝は、宮崎県の郷土史家の中でもとりわけ重鎮であった。東京帝国大学の国史学科を卒業し歴史学に精通していた日高は、宮崎県からの委託を受けて、古代から明治期までの宮崎県域の歴史を記した『日向国史²²』を古代史学者喜田貞吉と共同執筆している。この歴史書は、県制開始から間もなかった宮崎県のアイデンティティを確立するために編纂されたものであったと言ってよい。『日向国史』を執筆したことから明らかなよ

20 祖国館の展示委員になったのは以下の10名である。横山秀雄(宮崎神宮宮司)、日高重孝(県立宮崎中学校校長)、山本武一(宮崎県男子師範学校教諭)、若山甲蔵(県立宮崎図書館長)、河井田政吉(宮崎県史蹟調査員)、鹿島透(県立宮崎工業学校長)、日野巖(宮崎高等農林学校教授農学博士)、川添重広(第六宮崎小学校校長)、瀬之口伝九郎(宮崎県博物館主事)、山田久太郎(宮崎県女子師範学校教諭)。

21 日高(1970)、56頁を参照。

22 日高(1933)を参照：祖国館観覧の手引きである『伝説の日向』では日向神話の詳細を記したものと『日向国史』が挙げられている。

うに、日高は、宮崎県を代表する郷土史家であった。さらに、帝国大学卒業の宮崎県の郷土史家という社会的立場によって日高は、権威付けられたアカデミックな歴史学と宮崎県の地方史学とを結びつけられる媒介者だったのである。日向神話パノラマ制作には、皇国の歴史としての日本神話における「筑紫の国日向」と「宮崎の過去」との同一性を示す知識を必要とした。その際、日高のような中央と地方を媒介できる知識人の存在は大きかったのである。

日高は、会期中に配られた祖国館観覧用の手引き『伝説の日向²³』を執筆している。祖国館では、この手引きが配られ、さらには解説員が各景を説明した。学校教育でも日本神話が教えられていた昭和初期において、手引きと展示解説は、観客に神話の知識を与えるものではなかった。『伝説の日向』は、宮崎県内の各地を9景のパノラマが表現する神話の舞台として同定するものであった。つまり、この手引き書は、宮崎県内が日向神話の舞台であることを示すものであった。手引き書では、パノラマ各景が表す日本神話の簡潔な説明に合わせて、宮崎県域の歴史を記す『飢肥紀行』、『日向国風土記』の記述や県内各地の伝承、神社の社伝が引用されている。こうした記述構成は、パノラマが視覚化する日向神話の舞台である「筑紫の国日向」を宮崎県域内の各地に同定していくものであったと見てよい。つまり、廃藩置県以前の宮崎県域である「日向」と日本神話上の「筑紫の国日向」との同一性を示すものであったと考えられる。日向神話を視覚化したパノラマは、日本神話の中の日向神話を強調した。しかし、神話を視覚イメージ化するだけでは、神話上の「日向」と宮崎県の同一性を示すことにはならない。そこで行われたのが、手引き書の配布と展示解説である。さ

らに、手引き書の説明は、次のような特徴を持っていた。例えば、イザナギノミコトの禊祓と神々の降誕を表した第1景「橋の小戸の櫛ヶ原」の説明は次のように始まる。

櫛ヶ原は今、宮崎市の東方海浜一帯の汎称であります²⁴。

日向神話において、イザナギノミコトが禊祓を行った「櫛ヶ原」が、宮崎市内の東の海浜一帯に同定されている。この記述において重要なのが、神話上の「櫛ヶ原」と宮崎市内の海浜との時間的な連続性を示す「今」である。こうした説明は、日向神話の舞台を宮崎県の過去として位置づけるものである。こう説明することで、宮崎県域と日向神話の舞台の連続性が示され、宮崎県が、日向神話の舞台すなわち“皇祖発祥の地”であることが強調されるのである。祖国館の展示は、パノラマが視覚化した日向神話の舞台を手引きと口頭説明によって宮崎県域に同定していった。

4. “南国宮崎”一最も遠く、最も近い南国

これまで“新興都市”、“祖国日向”というイメージについて論究してきた。しかし、開催者たちが表現したのは、これら2つだけではなかった。開催者たちは、3つ目の“南国”も表現した。しかし、この“南国”は、パビリオンの展示においてではなく、ポスターや会場案内といった博覧会の開催に合わせて準備された印刷物において見られる。

祖国日向博では、観客たちに会場案内『祖国日向博覧会案内』が配られた²⁵。両面刷り8つ折りの会場案内の構成は次の様になっている。表面には、会場絵図が描かれ、その下には開催趣旨と各

23 日高(1933)。

24 同上、1頁より引用。

25 祖国日向産業博覧会(1933)を参照。

パビリオンの展示内容が記されている。その一方で、会場案内の裏面は、宮崎県内の名所名勝の写真付きの案内になっている。つまり、この会場案内は、観光案内を兼ねている。このことから伺えるように、祖国日向博の開催の目的のうちの一つは、観光客誘致にあった。開催者たちは、博覧会见物のために宮崎を訪れた観客たちを、宮崎県内の観光名所を訪れる観光客としても捉えているのである。

このリーフレットの口絵には、2枚の写真が載せられている(図7)。1枚目は、中央に橋橋を映す宮崎市街の航空写真である。そして熱帯の椰子に似た木々を映す2枚目は、宮崎市南端にある青島のピロー樹林を映したものであった。

宮崎市の都市変容を象徴していた橋橋は、“新興都市”イメージを表現するモチーフだった。そこで、1枚目の中央に橋橋を映した宮崎市街の航空写真は、“新興都市”を表現するものだったと言える。その一方で、2枚目の写真に映るピロー樹林は、宮崎が持つイメージ“南国”を表現していた。青島は、宮崎市の南端にある亜熱帯植物が自生する島である。1921(大正10)年の宮崎市の中心部と青島をむすぶ軽便鉄道の開通以降、この島には、多くの旅客が訪れるようになった。さらに近代以降、島内の植物が亜熱帯植物として人々に認識される中で、青島は、“南国”観光地としての名声を獲得し、宮崎市を代表する観光名所になった。温帯に属する日本国内にありながらも、亜熱

帯植物が自生する青島では、遠い熱帯地方へ出かけなくても熱帯的な景観を見ることができた。青島は、その近さから旅客を集めていたと言える。

博覧会の開催者たちは、観客さらには観光客誘致のために、この青島の観光名所としての有名性を利用していく。その際、青島のピロー樹をモチーフに表現されていくのが、“南国”である。“南国”は、開催宣伝ポスターにおいても確認できる。祖国日向博の開催を告げる宣伝ポスターは、第1回と第2回の2度に分けて配布された。

第1回と第2回のポスターの構図には、共通して、近代的な意匠を持ったパビリオンが林立する会場が描かれている。しかし、第1回と第2回では、それぞれ、配布されたポスター図案に違いがある(図8)。第1回のポスターは、博覧会場の背後に神武天皇がたたずむ図案であった。その一方で、第2回のポスターは、青島のピロー樹の後景に博覧会場が描かれていた。近代的なパビリオンが並び建つ産業博覧会の会場が象徴するのは、“近代化”や“産業振興”であり新たに勃興していく“新興都市”としての宮崎である。第1回と第2回のポスターは、産業博覧会場の前方と後方に、それぞれ、“祖国日向”と“南国”を表現するためのモチーフを配置している。第1回のポスターが強調するのは、この産業博覧会が“祖国日向”で開催されるという点であった。一方、第2回のポスターには、青島のピロー樹の背後に博覧会場が描かれている。このポスターでは、第1回とは異なりこの博

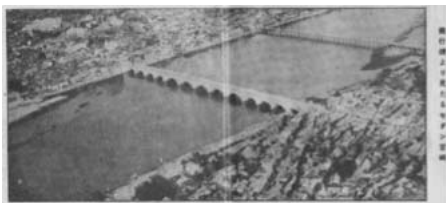


図7 リーフレットに見られる橋橋と青島のピロー樹

(左)「飛行機より見たるモダン宮崎」 (右)「青島ピロー樹風景」



図8 祖國日向博ポスター 第1回(左)と第2回(右)

第1回「博覧会場の構図に神武大帝の君臨したまふ図案²⁶」

第2回「博覧会場に青島のビロー樹を配せる頗る軽快、明朗なる²⁷」図案

出所：宮崎市役所 1934

覧会が、“南国”で開催される産業博覧会であることが強調されていた。つまり、これら2種類のポスターがセットになることで、博覧会場の後方に神武天皇を描いた構図と博覧会場の前方にビロー樹を描いた構図それぞれで“祖國日向”と“南国”という2つのコンセプトが接合されたのである。

2種類のポスターは、それぞれ同数の5000枚ずつが印刷された。しかし、興味深いことには、第1回と第2回のポスターでは、それぞれのポスターの配布地域に違いがあった。第1回のポスターが配布されたのは、全国各地である。それに対して、第2回のポスターは、主に九州圏内に配布された²⁸。全国に配布された第1回のポスターが表現する“祖國日向”は、大日本帝国内のあまねく地域に向けて発信された。つまりこの神武天皇という皇祖を描いた“祖國日向”を表現した第1回のポスターは、日向を祖國として共有すべき天皇制国家である「皇国」の人々に向けられたのである。その一方で、第2回のポスターが、主に九州各地に配布されたことから分かるのは、“南国”が九州の

人々に向けて発信されたイメージだったということである。確かに、博覧会が開催された当時、青島は宮崎市を代表する観光名所ではあった。しかし、青島を訪れる旅客の多くは九州圏内の人々だった。

これらのことが分かるのは“祖國日向”と“南国”を表現する2種類のポスターが、イメージの受容者に合わせて使い分けられたことである。つまり、開催者たちは、宮崎県が持つ複数の地域イメージのそれぞれを受容者に合わせて使い分けていたのである。

26 宮崎市役所 (1934)、250項より引用。

27 同上より引用。

28 宮崎市役所 (1934)、250頁を参照。

結論

これまでの論述を通して明らかにしようとした問いは、祖国日向博という宮崎で初めて開催された地方博覧会において、開催者たちが、宮崎という地方をどのように表現したのかであった。祖国日向博の開催者たちが表現していったのは、“新興都市”“祖国日向”“南国”という宮崎が持つ3つのイメージである。

まず、祖国日向博は、産業振興を目的に開催された産業博覧会であった。産業博覧会の開催の中で、開催者たちが表現したのは、近代化を遂げ新たに勃興していこうとする宮崎のイメージ“新興都市”であった。こうした“新興都市”を表現するモチーフになったのが、コンクリート製の橋樑である。木製からコンクリート製に造り直された橋樑を、モチーフに、生まれ変わり新たに勃興していく宮崎のイメージが表現された。“新興都市”は、宮崎の未来への展望するイメージだったとよい。しかし、その一方で、開催者たちは、宮崎の過去を表現する“祖国日向”も表現した。“祖国日向”は、宮崎の過去と天皇制国家の起源地を同一視することで表現されたイメージである。こうしたイメージは、宮崎が皇国において重要な地域であることを示すために表現されたイメージであった。さらに、開催者たちが表現していった3つ目のイメージが“南国”である。“南国”は、宮崎市の青島のビロー樹をモチーフに表現された。この“南国”を開催者たちは、九州圏内の人々に向けて発信した。“南国”は、地域を限定して表現されたイメージだったのである。

強調しておきたいのは、あくまでも地域は複数のイメージを持っており、さまざまなイメージ表現の契機においてイメージを使い分けるということである。本論につづく論文においては、戦後1954年に宮崎で開催された南国宮崎産業観光博覧会を事例に、地域がもつイメージの使い分けに焦点をあてて考えてみたい。

参考文献

- 小野和道(1986)『浮上する風景－宮崎市街の成立と展開』鉾脈社。
- 君塚仁彦編(2007)『平和概念の再検討と戦争遺跡』明石書店。
- 倉真一(2006)「博覧会からみた宮崎の近代」宮崎公立大学広報委員会(編)『地域を創る－新しい宮崎をめざして』鉾脈社、53-79項。
- 小林文広(2002)「近年の博覧会研究をめぐって」『ヒストリア』(No.202)、大阪歴史学会、188-192頁。
- 坂上康俊他(1999)『宮崎県の歴史』山川出版社。
- 白幡洋三郎(1996)『旅行ノススメ－昭和が生んだ庶民の「新文化」』中央公論新社。
- 千田稔(1999)『高千穂幻想－「国家」を背負った風景』PHP研究所。
- 祖国日向産業博覧会(1990)『祖国日向産業博覧会』(会場案内リーフレット)。
- 田代学(1996)『地図からみた宮崎市街成立史』江跡庵。
- 永井哲雄(2008)『宮崎県庁本館－近代の歴史文化遺産 その見どころと歴史』鉾脈社。
- 日高重孝(1970)『孤窓漫録』日向文化談話会。
- 日高重孝(1982)『追想記 日高重孝』非売品。
- 日高重孝(1933)『伝説の日向』祖国日向産業大博覧会。
- 古川隆久(1998)『皇紀・万博・オリンピック－皇室ブランドと経済発展』中央公論社。
- 宮崎市役所編(1934)『祖国日向産業博覧会並協賛会誌』宮崎商工会議所。
- 湯原公浩編(2005)『日本の博覧会－寺下勅コレクション』平凡社。
- 吉見俊哉(1992)『博覧会の政治学』中央公論新社。
- 吉見俊哉(2005)『万博幻想－戦後政治の呪縛』筑摩書房。
- 吉見俊哉(1990)「博覧会の歴史の変容－明治末～大正期日本における博覧会文化」『都市問題研究』42(3)、43-59頁。
- Morton, Patricia A. “Hybrid Modernities Architecture and Representation at the 1931 Colonial Exposition, PARIS”, Massachusetts Institute of Technology, 2000 (= 2002年、長谷川章訳『バリ植民地博覧会－オリエンタリズムの欲望と表象』ブリュッケ出版)